

---

# 首相が殺された

徳永信行

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

首相が殺された

### 【Nコード】

N3291M

### 【作者名】

徳永信行

### 【あらすじ】

中小企業対策補助金申請にまつわる不合理により発生した殺人事件（首相が殺された）を霞が関PP署の城島警部が追及するサスペンス。

初回更新日：2010・04・24

サスペンス小説 フィクション

捜査14課の事件記録（No1）

原作 徳永信行

首相が殺された！

top

第1章 背景

時は米国の金融恐慌が生じ、日本の経済が破滅に進んでいたときである。原油は数年前の約5倍の取引価格を構成していた。

国際的には原油の利権と核不安解消を求め、イランにイスラエルが先制攻撃を実施し、新たな致命的紛争を開始した刹那である。

日本の首相（霧谷）は、相変わらず変形した口を横方向に使う片岡知恵蔵のような声を出しながら、「危機だ、経済対策だ」とぶら下がりメディアをはじめ、閣僚にわめき散らした。その煽りを受け、財務官僚、自衛官僚をはじめ、多くの官僚たちは苦難に満ちた表情を余儀なくされていた。

そうした中、ホテル住まいの好きな霧谷は首相官邸に行かず、都内のアルカリンホテルの特別ルームにお気に入りの女性秘書と多数のSPを引き連れ滞在し、各省庁の官僚たちを呼びつけ「馬鹿野郎

！何とかせい！」などと怒鳴り散らし、威厳を示そうとした。

3日目の朝のことである。霧谷は植栽経験のある52歳SP（基屋）に、突然、実家の庭にあるパキラとコンシンネンの鉢植えを千葉から部屋に持ってくるよう指示した。

突然の命に驚いたが、基屋は農林水産省の川本（37歳）、と財務省知人堀江（24歳）に協力を求め、急ぎ千葉に向かった。

車中、3人は時の霧谷政権に対する批判やこれからの国を案ずる会話で深刻な顔をしており、特に堀江は何度も何度も「どうにかせんとイカン……せんとイカン」と繰り返した。

霧谷首相の自宅事務所すぐそばにおいてあった熱帯植物パキラと亜熱帯植物コンシンネンの2鉢を車に載せ、ホテルアルカリンに到着したのは出発から12時間後であった。ホテル側は植物の持込をはじめは断っていたが、霧谷首相の依頼とあって、特別に融通を利かせ、ルームボーイが引継ぎ霧谷の部屋に持ち込んだ。

その後、霧谷は植物が大変好きだということが周辺に広く伝わり、多くのゴマすり者が多種多様の贈り物を差し入れた。

2日後、事件は起きた。

霧谷首相本人と同宿していた首相お気に入りの女性秘書（小田）の2人がアルカリンホテルの部屋で死亡していたのが発見されたのである。

第一発見者は、AM8:00、朝礼に出ない首相の動きを不審に思ったSP（森田）が部屋をノックし、モーニングコールを繰り返

した上で、部屋に入り異変に気づいたと捜査記録にある。

捜査14課の現場検証では、首相と秘書の着衣に乱れはなく又外傷も無く、ベットに横たわりあたかも睡眠中のような自然体の屍であつたと記録され、部屋にも荒らされた様子が無く又不審者の指紋も、DNA鑑定を必要とする痕跡も見られなかったと同捜査課の城島警部（47才）が明らかにした。

又、城島警部はその後の記者会見で、死因は呼吸及び心不全が原因であると検視結果を発表した。また、毎録新聞の記者質問に対し、「一見病死のように見られるが、二人とも全く同じ死に方をしているので、著い事件性がある」と答え、病死と事件の両面から調査すると説明した。

国内外の新聞及びメディアはこの事を一斉に号外、臨時ニュースにより伝え、国内だけでなく海外でも大騒ぎとなり、一時日経平均は2,000円以上の下げ、国債は暴落した。

(1)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

2010・05・01更新

鑑識を交えた室内の初動捜査では、不特定多数の利用者による古い指紋、毛髪（DNA鑑定用）等の遺物は採集されたが、本件との関連を疑うべき物は何も発見できず、何よりもSPの警護に守られた部屋で、施錠は内部よりなされ、外部に接する窓は近年のエコブ

ームの傾向から、保温二重密閉構造で開閉は出来ず、外部からの侵入は出来ない構造であることがハッキリしていた。

また、霧谷首相と秘書の小田の遺体を室田監察医務官が解剖した所見では、「両名の遺体には外傷も毒物反応も見られず、ただ、心不全とそれに関係する呼吸不全であって、踏み込んで考察すると、窒息した形跡（首は絞められていない）が診られる」とのことであった。

世間はこうした内容を知るにつれて、「やはり病死だったんだ」と思うようになり、この件についての関心は、日を追うごとに薄れていった。

捜査１４課の城島警部は「二人が同じ死に方をしたのはなぜか？こんな事があるのか？」と刑事特有の疑問を持ち、周囲の反対を押し切って、特別捜査本部／専従捜査班を捜査１４課に立ち上げた。

周囲への遠慮もあつて専従捜査班は自分より若い白石警部補（３２才）、黒田刑事（３５才）と女性刑事の三田（２８才）の四人で構成することに許可を得た。

城島警部たちの最初の行動は、監察医務官の室田に遺体の保管を依頼した。室田は「遺体が遺体だけに、長期の保管は出来ないよ」と彼らに諭すように言った。

城島たちは必死に食い下がり、「ならば死因の原因部位の組織を保管してくれませんか？」と願い出るとともに、最大の疑問点である「二人が傷も無く同じ死に方をしている」ことを強く申し述べ、事件の可能性を説明した。

監察医室田も最初はいぶかっていたが「わかった、それでは国の許可を得て、組織の一部をごく僅かではあるが冷凍保存しましょう」と彼なりの最大限の協力を申し出てくれた。

事件と思われる事案の発生時から7日後、城島警部らの苦難に満ちた捜査が開始された。

最初、城島警部は部下の白石警部補に「後2、3日、例のホテルの部屋をそのままにしておくよう、ホテル側と交渉し、もう一度部屋に入りホテルの所有物以外のものがあるかないか調べてきてくれ」と指示した。

また、黒田刑事と三田刑事には「江東大学医学部の中嶋教授に俺からのお願いだ・・・心不全、呼吸不全の原因、毒物など何でも良いから情報を貰ってくれ」と指示した。

一方で城島警部は本部の鑑識課に出向き、昔からの付き合いがあり酒友の猪熊（47才）と会い、事情を話すとともに「再度の鑑識調査を一緒にしてくれんか」と頼み込んだ。

猪熊は半信半疑ながらも「お前がそこまで思うなら協力をする」とあっさり引き受けてくれた。

こうして、事件を前提とする捜査が開始され、数日の時間が流れた。

この段階では、城島警部をはじめとする捜査担当者は、これから解明されて行く驚くべき事件の真相を知る由も無かった。

霧谷首相と女性秘書の小田の死はやはり殺人事件であったのである

る。

(2)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

2010・05・04更新

## 第2章 捜査の進捗(1)

警部城島は「この事件と思われる事案は、事件とするならば動機は一体何なのか？」と考えを巡らせるとともに、専従捜査班の皆と一緒になって懸命に考えたが、動機らしき首相周辺の事象はすぐに捜査の線上にあがることは無かった。

そこで、城島は初心に帰り、動機の可能性について、あらゆる利害関係者の有無について、専従捜査班全員に「今夜中にどんなことでも良いから、動機になるようなことが考えられるなら、明朝の捜査会議に提出してくれ」と云い残し、先に部屋の調査を頼んでおいた白石警部補と一緒に、事件現場のアルカリンホテルに出向いた。

所轄の霞が関PP署を出ると、外は蝉しぐれの夕刻で、どこからとも無くビルの隙間を流れる初夏の街風が吹き抜け、首筋にあった汗が少し和らぐのを感じた。

徒歩約８分の同じ霞が関に、アルカリンホテルはあり、普段は特別な宿泊者の利用、会議利用などに利用される都内では一流と称されるホテルである。

警備は厳しく、城島らは入り口で警備員に警察手帳を見せてホテル内に入った。そして、フロントでも同じ行為をしたうえで、応対に出た支配人とともに問題の事件現場室内に入った。

支配人は「事件が首相が亡くなったという異常性から、所轄の意向に従いそのままにしてあります」と恩を着せる様な言い方をした。

城島らはあまり気にせず部屋の中を隅々まで、初動捜査時よりも詳しく撫で回していった。そこに突然、鑑識課の猪熊が「お前がこっちと聞いたのでやって来たよ」と云って調査に加わった。

そこで彼らの見たもののうち奇妙に感じたものは、霧谷首相がＳＰの基屋に命じて持ち込ませたパキラ、コンシンネンをはじめ、ご機嫌取りが届けた植物（特に観葉植物）の全てが略枯れつつある状況であった。

そこで、城島警部は植栽経験があり、パキラとコンシンネンを持ち込んだＳＰ基屋に電話をし「すまん、至急で悪いが現場にきてくれ」と頼んだ。基屋は外国要人の警備中であつたにもかかわらず息を切ってやってきた。

すぐさま、城島警部はＳＰの基屋に「あんたが持ち込んだ植物が何日も経っていないのにこのような有様になるのは如何してか？」、「何が原因だと思うか？」とたたみかけ問いかけた。

驚いた顔をしながら、少し間をおいて、基屋は当該観葉植物の鉢土の状態を指触して「パキラやコンシンネンはどちらかと言うと熱帯の植物で、クーラーの効いた部屋などでは、水をやり過ぎると立ち枯れしやすいのですが、鉢土を触ってみたところ、よく乾いていますので、いくら設置環境が変化したからと云ってもこのようにまで痛むことは考えられないのですが・・・」と判断した。

基屋は続いて、ご機嫌取りのやからが持ち込んだ外の観葉植物を観察しながら「寒冷地、過湿に抵抗力のある観音竹でさえ、弱っているのは異常です。」と話した。

城島、白石、猪熊の3人の警察官は互いの顔を見あわせ、目配りでその観葉植物鉢を鑑識調査することに合意した。

；続きは次回更新までお待ちください。

(3)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

2010・05・08更新

城島警部達3人の警察官は、その後、部屋の一部始終を再度調査、ホテルの所有物以外のもの、不審と思われる物品及びその残骸などを収集し、鑑識で分析することとし、袋に小分けして持ち帰ることにした。

城島は「ご苦労さんやったな、すまんかった」と猪熊と白石に礼

を云い、「明日の捜査会議で思いつく意見を出してくれよな」と頼んで、ホテルのロビーにあるラウンジでアイスコーヒーを飲みながら打ち合わせと少しの休息をした後、それぞれの家路についた。

翌朝は朝早くから30 を越す暑さの中、専従捜査班4名全員と本部鑑識課の猪熊が加わり、午前8時から捜査会議を開いた。

まず、江東大学医学部中嶋教授に意見を聞くために出向いた黒田刑事、三田刑事から報告を聞くことにした。三田は「中嶋先生は検視報告書を見る限り、死因に特別な疑問点はないが、政治家という特殊な背景も考慮すると、通常では考えられない手法によるテロの可能性は残る・・・なぜなら首相と秘書の死に方が同じであるという城島が感じていることと同じ」と云っておられると報告した。

さらに黒田は「それと先生は、遺体の、死に至る直接原因細胞組織が少しでもあれば何かを見出すことが可能かもしれない」と云っておられましたと報告した。

城島は「ああそれなら丁度、監察医の室田先生にお願いして細胞組織の一部を冷凍保存してもらってあるから、昼からにでも中嶋先生に渡して調べてもらってくれ、全部でなく少しは残しておいてくれ」と全員の同意を求めるとともに黒田と三田に指示した。

さらに城島は「中嶋先生には、すまんが猪熊・・・お前も同行してくれんか」と頼んだ。猪熊は興味がある様子ですぐ了承した。

次に城島、白石、猪熊が昨日ホテルで調査した内容と疑問点をかいつまんで報告し、「現在、猪熊の本部鑑識課でしらみつぶしに分析、解析している」と誰かれなく報告した。

「ところで動機は何だ？」誰もはまだ考えつかない様子で、「もう少し時間をかけよう」と全員の思いであり、雰囲気として暗黙に了承することにした。

ただ、彼らの頭には「……政治家であり首相という立場への政敵及び政治的利害関係？」の関連では？と思考しだしていた。

普通の事件の場合、特に最初、動機の調査確認が行われるものであるが、この件については、霧谷首相の周辺範囲が広すぎ、容易に事件動機の保有者を選別出来づらいこともあり、専従捜査班は事件の手口の確定から進もうという雰囲気になっていた。

猪熊からは「ホテルから押収してきたものは、持ち込まれ殆んど枯れた植物の鉢と土壌、植物育成用に設置したと見られる加湿器、タオル、ゴミ箱の廃棄物の全部、体液、毛髪、便箋、衣類、鞆、靴、携帯電話などである」と説明があり、これらについては本部鑑識のメンバーの協力を得て、早急に分析、解析するようにしていると報告が示された。

専従捜査班は捜査会議を約30分そこで切り上げ、各々必要な捜査行動に向かうこととし、城島を捜査課に残し、迅速な行動を開始した。

捜査課に残った城島は、捜査員の連絡を待つ間、「二人の死因が同じ、ホテルの部屋の観葉植物が枯れていた、部屋は密室であった、SPが部屋の前で24時間厳重警護していた、死者は政治家と秘書……」と自分が知り得た事実のみを繰り返し考え、事件の手口を発見しようと必死に考えていた。

暑苦しい窓越し風景を眺めていたとき、黒田、三田と一緒に江東

大学医学部中嶋教授に出向いていた猪熊から、事件と関連する第一報が入った。

「死者の細胞からは毒物らしき痕跡は無いが、鬱血膨潤状態が見られるので、生体細胞組織検査では不明であるが、ESCA分析により発見されるものがあるかもしれない・・・」と中嶋教授が述べたとの報告であった。

「ESCA分析器は5ミリ程度のサンプルがあれば充分行うことが出来るのでやってみよう」と協力を申し出てくれたのである。

；続きは次回更新までお待ちください。

(4)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

2010・05・09更新

## 捜査の進捗(2)

猪熊によると「鑑識にはESCA分析器は無いが、別名XPSとも言われる、X線光電子分光分析装置のことをESCAと云っており微小な表面組織の元素分布を測定するものだ」と説明してくれた。

また、「中嶋先生は、大学の医学部には無いので、電子工学研究室にお願いして調べてくる」と云っていたと城島警部に伝えた。

城島は「俺は何のことか理解できないが、猪熊はどう思うか？、何か不明なことがわかるのか？」と不安げに尋ねた。

猪熊はE S C Aの原理を熟知しているようで「毒物以外の微少な化合物の検出などでも、非常に精度よく分析できるものだよ」と説明してくれた。

城島は「毒物以外で、人命にかかわるものがあるのか？」と猪熊に突っ込んだ。

猪熊は「それは分らないが、異物の発見が出来れば捜査の進展に繋がるのではないか」と城島の刑事としての勘を上回るような言い方をしたので、非常に城島は驚いた。

城島は、猪熊の一言で、遺体の細胞が鬱血し膨潤しているのは、明らかにものを言わない死体が伝える言葉であることを改めて教えられ、刑事としての未熟さを感じた。

そのころ、江東大学の電子工学研究室では中嶋教授の立会いのもと、提供された霧谷首相と秘書小田の遺体細胞をE S C A分析しつつあった。

一方、本部の鑑識では、現場から採集された髪の毛、体液などをDNA鑑定を行い、また、廃棄物の調査をし、さらに異常な枯れ方をした観葉植物と土壌の調査分析、加湿器などありとあらゆる調査分析と解析を行っていた。

DNA鑑定では不特定多数の遺伝子情報があらわれ、その数は数百にのぼり、事件との関連を結びつけるものにはなり難く、データ

―保存のレベルを余儀なくされていた。

また、観葉植物、土壌、加湿器からもなんの毒物も発見されず、廃棄物その他からも人間の生命を奪うような毒性を持つ物質も検出されなかった。

そうした中、江東大学医学部教授の中嶋から、「城島さん、猪熊さん急いでこちらまで来てくれませんか」と城島の携帯電話に連絡が入った。

城島と猪熊は、本部の鑑識に補助要員として白石警部補を残し、通勤時間で込み合う都内を赤灯とサイレンを鳴らし、新宿にある江東大学医学部に駆けつけた。

黒田刑事、三田刑事の両名は既に大学に到着しており、中嶋教授の手伝いをしており、城島らに我先に説明しようとし「警部、大変なことが分りました・・・」と言いかけたが、城島は「中嶋先生、どうしました？何か分りましたか？」と中嶋教授を真剣な顔つきで見た。

中嶋教授は「実は最初の検体からは細胞組織の構成物以外に何も出なかったのですが、電子工学の助手が検体を正確に作るうとして、冷凍保存された細胞をそのままスライスして、冷凍状態のまますぐESCA分析を実施したところ、時系列上、最初の数分間の間、検体からはF、C、C1がピークとしてあらわれ、その後、検体の解凍が進むにつれ、徐々に消滅したのです」と説明された。

城島は、それがどういう事を若い刑事の黒田、三田は理解しているなとは思ったが、中嶋教授に「今説明されたことを理解するにはどうすればいいでしょうか？」と学生のように甘えた。

理工系を出た猪熊は事の重要性を既に理解していたが、自分で理解しないと納得しない城島の性格を知り尽くしているので、あえて何も言わずに成り行きを見守った。

中嶋教授は学生を見るやさしい顔になって「これは、細胞の中にフロン特に揮発性のフロンガスが存在していたことを示しており、検出元素から推定すると、CFC即ちクロロフルオロカーボンであると考えられます」と説明し、さらに「CFCはいわゆるオゾン層の破壊に繋がる比較的古いタイプのフロンガスといえますね」と付け加えた。

まだ理解できない城島は「そのフロンガスで人間を死亡させる能力があるとおっしゃるのですか？」と法学部出身の刑事らしい質問を続けた。

中嶋教授は続けて「フロンガスは比重が重く、気体として吸い込むと通常自力では肺から排出することは困難で、心不全を伴う窒息状態に至ることがあるのです」と説明した。

城島は「では、あの部屋でフロンガスがまかれたのか？それを吸い込んだのか？でもそんなことが出来る安易な警備体制ではなかったはずだ」と思った。

しかし、事件の手口は間違いなくフロンガスを使用したものであった。

：続きは次回の更新までお待ちください。

(5)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

2010・05・12更新

### 捜査の進捗(3)

中嶋教授と城島のやり取りを聞いていた猪熊は突然何かに憑かれたように「ああそうだ!」と声をあげ、城島の携帯電話に記録された本部鑑識課にいる白石警部補に電話を入れた。

猪熊は白石に事情を説明する一方「鑑識の化学担当の森野に繋いでくれ」と連絡をし、電話口に出た森野に「枯れたコンシンネン、パキラ等の観葉植物の葉を区別して採集して白石警部補に渡してくれ」と頼んだ。同時に、「先端捜査研究所に問い合わせて、ESCA分析器を保有していないか調べてくれ」と指示した。

森野は採集した観葉植物の枯れた葉の一部を白石に渡すとともに、ESCA分析器の有無を先端捜査研究所に問い合わせた。

先端捜査研究所からの返事は「ESCA分析器を保有しているので、急ぐならすぐに来なさい」との好意的なもので、森野はその旨すぐに猪熊に伝えた。

一方、枯れた葉のサンプルを抱えた白石は、城島、猪熊、黒田、

三田の待つ江東大学に向け、これも赤灯とサイレンを鳴らし、緊急走行で駆けつけた。

白石が到着するまでに、猪熊は鑑識の森野に「ご苦労様だが、枯れ葉を持って、これからすぐに先端捜査研究所に行き、すぐにESCA分析してくれ」と頼んだ。森野もことの重大さを察し、急ぎ先端捜査研究所に走った。

城島は猪熊の素早い行動に呆気にとられながらも、到着した白石警部補からすぐさまサンプルを預かるとともに「先生これを分析して下さい」と中嶋教授にお願いした。中嶋教授も捜査官の熱意に感嘆し、快く追試を引き受けた。

数時間の経過後、外は暗闇の深夜になっていたが、立ち会っていた捜査員全員は興奮気味に「ウオー！ウオー！・・・」と声にならない叫びにも似たわけのわからない表現で、お互いの顔を見合った。

枯れ葉のESCA分析の結果は、植物の気孔に吸い込まれた微量のCFCが検出されたのである。

一方、先端捜査研究所において森野が実施したESCA分析からも微量のCFCが非定量ではあるが存在することが明らかになった。森野は「猪熊さんの予測通り、CFCがありました」と江東大学にいる猪熊と城島に急ぎ込んで報告した。その時すでに午前2時を回っていたが捜査員たちは興奮して時の経つのを忘れていた。

このように捜査が進展しつつあるにもかかわらず、城島警部はどうも納得していないらしく眉間に皺を寄せた不思議な表情をして「CFCはどこから来たのか？」「わからん・・・」と一人言を云いながら考え込んでいた。

女性捜査員の三田刑事が「今日はここまでにして、頭を整理して考えませんか？」とアイディアを出し、一同我に返り「そうだね」と納得して、その場を収めることにした。

城島は、お世話になった中嶋教授、捜査員全員及び猪熊に、せめてもの感謝の気持ちの夜食にラーメンを食べに行こうと誘った。

捜査員たちは大学を出る際、鑑識の森野に協力のねぎらいと、日を改めて食事に誘うことを告げて、深夜の街路に出た。ちょうど出たところに大学の院生が夜食をよく取るいかにもラーメンがうまさうな中華料理店があったので駆け込んだ。

6人で食べたためか、濃厚な味のラーメンはすこぶる美味しく感じた。食べ終わったときに全員ようやく我に返り、捜査が緒に就いたことを喜んだ。

パトカーで中嶋教授を家まで送り、城島が自宅に着いたのは初夏の日の出の早い午前4時前であった。皆には「今日の出署は10時頃で構わん」と精一杯のねぎらいをして車を降りた。

自宅に帰り、ベッドに潜り込んだものの、城島は「CFCはどこからどのようにして……」と頭をよぎり、朝まで眠ることは出来なかった。

午前7時過ぎ、スッキリしない風貌のまま出署に向かったが、朝の通勤電車の蒸暑苦しさに頑強な体を自負する城島であったが耐えがたいものを感じた。

城島が所轄署に着いたのは午前9時過ぎであったが、特別捜査本

部の専従捜査班全員と猪熊が当たり前のように出署していたのにはさすがの城島も驚き「オッス！」と力一杯の声を出し、皆の気持ちに内心で感謝した。

城島が席に着くか否かに、アイディアは女性の方が鋭いのか、三田刑事が「CFCは加湿器から発生させたのではないのでしょうか？」と専従捜査班全員に投げかけたのである。

猪熊も同様の考えを持っていたようで、「先ほどフロンガスメーカに問い合わせたところ、古いタイプのCFCは沸点が低く、中には-20 程度のももあり、加湿器で充分気化できると思う」と意見を出した。

では「押収してある加湿器に何らかの証拠が残っていないだろうか？」と城島が全員に問いかけた。しかし、全員からは「低温でも気化するのだから、もう何も残っていないのでは……。」と一致した意見が出た。

しかし何を思ったのか城島は「猪熊に鑑識で、メーカ名と仕様を調査するよう連絡を取ってくれ」と頼み約1時間後鑑識からの報告を見て、ニヤリとほくそ笑んだ。

メーカからの連絡によると、気化気体、ミスト噴出部には構造上不織布と可塑性粘着物からなるパッキンが接合されているとの情報であった。

城島は「すぐ加湿器、特に接合部の冷凍サンプリングをして江東大学と先端捜査研究所の2か所でESCA分析してもらってくれ」と指示した。

捜査員全員「もしかして、接合部の不織布に痕跡があるかもしれない」と予感した。分析の結果、その予感は見事に的中したのである。

不織布パッキンからは微量ではあるが明らかにCFCの定性が見られたため、加湿器がCFCの気化ガス発生源であると初めて認定できたのである。

したがって、何者かが殺意を持って加湿器にフロンガスの液体を入れ、霧谷首相の植物好きに乗じて送り込んだことがこの事件の手口になったものであるとほぼ確定した。

加湿器で気化されたフロンガスは比重が空気より数十倍重いので、天井に換気口があっても換気されることが無く、首相と秘書の睡眠中にベッド周辺に漂い、これを吸い込むことにより、心不全、呼吸不全となる窒息を起こしたものであると断定された。

続きは次回の更新をお待ちください。

(6)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

更新日：2010・05・13

### 第3章

#### 捜査本部の拡大と深化

城島警部らの捜査報告は所轄の警察（霞が関PP署）署長を通じて、警視庁及び公安部、内閣府にただちに連絡され、各所は大混乱

に落ちるとともに、機密保持の緘口令が發布された。

しかし、何時ものことではあるが、緘口令のスキを突いた官僚からの情報リークが特定のメディアにあり、「霧谷首相と秘書は何者かに殺された……」と一瞬にして、広く国内全域に伝わってしまった。

丁度その頃、首相の国葬が執り行われていたさなかで、外国からの元首を含む弔問高官が訪れていたこととメディアの同行もあつて、事件は瞬く間に世界に報じられた。

巷では警察、公安部等の公権力を無視して、犯人、犯行の推測等が面白おかしくいつもの無責任コメント達によつてTV、新聞を媒体として流され始めた。TVでは早朝から特番報道を組み、新聞では号外、一面トップで報じられ大騒ぎになった。

一方、ことの重大さに鑑み、警視庁は所轄捜査本部を格上げし、庁内に特別重大事件捜査本部を警視庁長官を本部長とする300人捜査体制として立ち上げた。また、公安部は秘密裏に専門職がそれぞれの分野でほぼ全員体制で捜査にあたる様子であつた。

こうした中、城島警部達の捜査本部は捨て置かれ、警視庁本部、公安部の情報聴集に協力を求められ、今後の捜査は全て彼らが担当することになるが如く感じられたが、幸いなことには城島達に何の命令も発せられることは無かつた。

城島達は上部組織の混乱の空白を有効に使い、独自の捜査を続行することにし、「今日までに犯行手口は解明された。では動機は何なのか？」と全員の目は移っており、捜査の意欲は益々高ぶっていた。

騒ぎの翌朝の捜査会議、と云っても猪熊と協力をしてくれた鑑識の森野を入れ、わずか6人の会合であったが、面々には捜査官としての自負と熱意があふれていた。

席上、しばらく汗が滴るのを我慢して腕組みをしつつむき加減で考えていた城島が、突然、戦国武将のようにカツと目を開き「動機は首相を殺すのが目的であるとするなら、政敵又は最近の政策にあるのではないか？また、この事件は2人殺されている、即ち、女性秘書小田であり、可能性は少ないかもしれないが彼女を殺す目的で犯行が行われた場合も考えて調べる必要がある」と切り出した。

もつともと頷いていた白石警部補は「同感！では本日より、霧谷首相と小田秘書の最近の動向と関係者の調査をやるべきですね」と賛同した。城島が皆をみると全員頷くのが確認できた。

城島達を気遣って捜査14課の課長が差し入れてくれたコーヒーを味わいながら、これから始める捜査の手始めを決定し、それぞれ捜査員は城島、猪熊、森野を残し、素早く調査行動を開始し街に駆け出した。

城島は改めて森野に「先日は深夜まですまなかった、裏が取れて随分助かった」と礼を述べるとともに、猪熊と森野に「ところで、フロンで人が死ぬなんてことは事故などで今までに有ったのか？」と自身が事件の手口を再度確信するためにひつこいとは思ったが訊ねた。

工学部出身の猪熊は「あれは約20年前だったかな・・・大田区のメッキ屋さんでの事故だったんだよ、メッキは水を使うだろ、そこではプラスチックのような耐熱性の低い材料にメッキをする仕事

をしてたんだよ、熱風乾燥が出来ないので、フロンはその替りの乾燥剤として使用してきたんだね」と昔を振り返り説明した。

そして思わぬ死亡事故が発生してしまったと猪熊は続け「フロンを充填したタンクに品物が落ちたため、従業員がタンクに入り取ろうとしたんだ、その時、フロンを肺に吸い込んでしまったんだ、すぐに他の従業員がタンクの外から助け上げたのだが比重の重いフロンは人工呼吸をしても肺から出ず、呼吸が出来なくなり心不全を併発して即死したんだ」と解説した。

猪熊の話を聞きながらそばにいた若い森野は「今はM S D S / 製品安全データシートを誰でもインターネット等で簡単に手に入れることが出来るので、知識はすぐに手にすることが出来ます」と付け加えてくれた。

城島は鑑識課の猪熊、森野を尊敬した顔で見つめながら、漸く揺るぎない犯罪手口の確信を持つことが出来た。

そんな話をしている間にか昼になっていたので、城島は「飯を食いに行こう」と先日、森野に約束したことを律義に実行し、3人で近くの定食屋に行き初夏の昼にもかかわらず、サザエの壺焼き定食を頼み、3人とも好物らしく汗を流しながら食べていた。

混んだ店の片隅からはお昼のTVニュースが流れていた。わき目も振らず食していた城島が突然箸を置き、捜査で見せる怖い顔をしてTVに見入った。

ニュースは、イランの原子力施設にイスラエルが爆撃をした結果による戦争が開始された映像を流した後、米国発の世界金融恐慌と日本経済の破滅状態を知らせるとともに、日本政府が緊急不況対策

として実施した中小企業の金融支援関連のニュースで、島根県をはじめ各地地方で、多数の中小企業が政府支援金の募集に応じたにもかかわらず、採択されずに終わりその会社は困窮し、一部の中小企業は倒産し、経営者は自殺した・・・・・・と報じられていた。

城島は公務員である、したがって、こうしたことにはあまり関係ない安全な職業でもある。しかし根からの熱血漢である城島は、こうした不幸を見逃すことが出来ず、真剣なまなざしでニュースを見たのである。

城島は猪熊に「こんなことがあっていいのか？政府は中小企業を広く平等に助けると、この前云っていたのではないのか？」と涙ぐんで抗議するように呟いた。

猪熊は城島を慰めながら「確かにかしいよ、助けてもらえる企業とそうでなく見捨てられる企業を誰が判断するんだろう、お前が矛盾を感じたのは当たり前だとおれも思うよ」と疑問を投げ、城島に同調した。

なんとかその場を繕って、怖い顔をした城島を気遣いながら、彼の霞が関P.P.署前まで送り届け、猪熊、森野は本部鑑識に戻ることにした。

鑑識へ戻る道中、森野は猪熊に「城島さんは凄い正義感のある人ですね、私もあのような人になりたいです。」と言ってくれた。

猪熊にとって友が尊敬されることほど嬉しいことは無かった。「城島はその正義感で今まで難解な事件をいくつも解決してきたんだよ」と森野に諭すように伝えた。

猪熊はこの時、城島が自殺した中小企業の経営者達に同情したことで、この事件とが大きく関わってくるとは夢にも思わなかった。

続きは次回の更新までお待ちください。

(7)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

更新日：2010.05.14

一方、警視庁長官を本部長として発足した、政府肝いりの捜査員300人体制大捜査網は、人数が多すぎて、大組織特有の問題を生じてしまい、それぞれの役割分担を決めることさえ上手くゆかず、笛吹けど踊らず混乱の極みとなっていた。

また、公安部は特定の従来データを検索、膨大な範囲の不審者、特にあまりにも飛躍した要素を検討しているに過ぎず、とても捜査をしているとは思えない状況を曝していた。

いずれの組織も、城島達がすでに事実確認を済ませた事件の手口を再度実証確認することが、精一杯な様で、犯罪を突きとめて行くにはかなりの時間を必要とするようになってしまっていた。

その頃、霞が関PP署捜査14課特別捜査本部、専従捜査班の白石、黒田、三田の各捜査員は城島の指揮下で、動機の選別に懸命になっていた。

そうした中、城島が「明日、一日の日帰りで関西に行ってくるので宜しく」と突然切り出した。

皆は「何をしに行くのですか？何か思うところがあるのですか？」と訊ねた。

城島は笑いながら「事件と関係は薄いかもしれないが、霧谷首相が主導した中小企業支援政策について、どのように関係者が評価しているか調べてくる・・・霧谷首相が打ち出した目玉政策だから」と云った。

この時、城島は事件の本質から、首相と政策を司る秘書が殺害された事件の犯人は、一般世俗の殺人事件で有れば個人的な怨恨等のトラブルが動機であることが多いが、あまりなじみもないであろう国家のトップを狙うのは、時の政策に対する不満が一番関係してくると思うのが常道であろうと考えていたのである。

城島はあらかじめ大阪に転勤した旧友の下田警部に連絡したあと「関西では中小企業が多い東大阪市に行き、布施署に勤務する昔の仲間、下田警部を訪ね情報を貰う予定だ」と説明した。

城島は「すまんが、動機の絞り込みが今一番必要だから、皆で協力してこれが一番という動機を見つけ出してくれ」と全員に云い残して、東京駅前発の夜行バスに乗り込むため署を後にした。

午後10時丁度到大阪行きJRの夜行バスは出発した。城島は下田への土産に草加せんべいを2袋買い込み、手提げバック一つの軽装で乗り込んだ。

大阪行きの夜行バスは比較的すいており、目に付いたのは城島の前席に位置取った、かなりの荷物を持つ60歳後半とみられる老夫婦の姿であった。

城島は荷物棚に容易に上げることが出来ない老夫婦に「私が上げましょう」と申し出て手伝った。

老夫婦は何度も何度も「ありがとうございました」と礼を云い、静かに着席した。

夜行バスは順調に走行し、確か東名の豊橋にさしかかる頃であった。ひと眠りしていた城島の耳に老夫婦のか細い話声が聞こえ、城島が興味を持つ会話で有ったため、悪いとは思ったが聞き耳を立ててしまっていた。

老夫婦の夫は「私が公自連党後援支持母体の、商店街の商工会に入って無かったのが原因だったんだよ、入会していれば簡単に支援金はおりていたと思うている」と妻にいかにも悔しそうに話していたのが妙に記憶に残った。

城島は話の内容を詳しく知りたかったが、それ以上の行動は老夫婦に負担が生じると考え、あえて話を聞こうとはしなかった。

窓のカーテンを少し開けて外を見ると、少なくとも10T以上はあるだろうと思われるトラックばかりが派手な光源をばびこらし走行しており、見方によるときれいなイルミネーションのように見えた。

何時しか深い眠りについていて城島が目を覚めたのは、カーテンを少し開いたままにしておいた窓から、朝日がまぶしくさしこん

だ午前5時ごろで、バスは京都と大阪の境界付近を走行していた。

前席の老夫婦は疲れたのか、熟睡しているように見られ、城島は起こさないようにトイレにたち、昨晚、老夫婦が話していたことを思い出していた。

大阪駅前に到着したのは、すでに通勤で混雑する午前7時頃であった。城島は駅構内の軽食堂でコーヒーとスパゲティーを取り朝食とした。

売店で新聞を購入したが、例の事件の記事で紙面は埋められていた。

午前8時少し前、城島は近鉄布施駅に到着した、改札を出ると、懐かしい童顔の顔をした下田警部が立っていた。「何時から待っていてくれたんだ？すまんな……」と城島は敬礼をして敬意を示した。

下田は「オイオイ、敬礼はいらんぜ、少しも待っていないよ」と相手の態度に気遣いを見せた。

下田が用意した車に同乗し、約5分で布施署に到着した。下田は「早く帰らないとだめなんだろう？、早速聴取しろよ！」と友を気遣う姿勢を見せ、城島を急かせた。

城島は下田えの土産を渡すことさえ忘れ、東京の定食屋で見たTV報道のこと、夜行バスで聞いたことなどを取り混ぜながら「現在の政権党の公自連党政府が実施した中小企業金融支援策の評価は、中小企業の多い東大阪ではどのような評価になっているか？」とズバリ聞いた。

下田は少し間をおいて「結論から云うと、極めて不満を持つ中小企業の経営者は全体の約15〜20%位ではないかと思う」とし、さらに「募集期間が公布後2週間程度であったことも不満の一つだったようだ」と城島に伝えた。

下田はさらに話を続け「今回の中小企業支援策は、約一兆円のバラマキ施策であって、書類の作成にはかなり手間暇が要り、困窮している小規模の会社では到底期日に申請書類を提出できなかったようだ」と云った。

また「噂では、中小企業の所属する団体が公自連党の支持母体で有ればほとんど何も書かなくても簡単に申請書として取り扱われたと聞いている」と続け、「選挙に利用できる企業にバラマキをしかも高額にした」とも噂にあり、「困ったもんだと我々も思っていたが、違法性はないので手は下していない」と下田は説明を続けてくれた。

加えて下田は「何かの違反が無いかを調べているが、公自連党の支持団体、例えば、中央会、商工会その他の地縁血縁縁故の団体に入会していなかった企業は、いくら素晴らしい申請書類を用意しても不合格の審査結果になったようだ」と付け加えた。

城島は尋ねた「公自連党の支持企業はどんな扱いだったのか?」と

下田は次のように答えた「ある程度の証拠は掴んでいるが、公自連党の支持企業はほとんど何も書いていない申請書を出してもまた金額が大きくても簡単に合格して、すでに無償支援補助金を実行してもらったようだ」

聞いていた正義感が強く熱血漢の城島は「クソッ！なんて酷い奴らだ、何のための中小企業支援策だ！」と怒りをぶちまけた。

下田や城島のように後期中年になれば我が日本の構造が、地縁血縁縁故で凝り固まり、長らく政権を職業のように独占して、したい放題をしてきた公自連党次第で良い目もすれば、悪い目にも合うということが解りだすものであるが、そんな彼らもこの国に住んでいるのである。

殺害された霧谷首相は公自連党の総裁でもある、また女性秘書の小田は首相の政策を決める特異な権力を持つ立場にある。したがって、話の内容は殺意の動機の一つになると城島は感じた。

話を聞き終えた城島はすぐに、所轄署で自分の留守を預かる白石警部補に連絡し「大田区に集中する中小企業において、今回の支援施策に関するトラブル等の有無について調査聞き込みを開始してくれ」と指示した。

城島は「下田、すまんがどこか不合格になり、支援金がおりてこなかった中小企業の経営者に会わせてくれんか？」と頼んだ。

下田は快く「ああ、知つてるところがあるので、これから案内するよ」と引き受けてくれた。

；続きは次回更新までお待ちください。

[戻る top](#)

[戻る \(index\)](#)

[戻る \(sub0021\)](#)

更新日：2010.05.15

下田から色々情報を聞いているうちに、いつの間にか午前10時を少し過ぎた。2人の警部の伯仲したやり取りを見ていた、布施署の婦警が「お茶でもお召しあがれ！」と休息を勧めてくれた。

城島は土産の草加せんべいのことをその時になって思い出し、下田と婦警に「遅れてすまなかったが、これ東京の定番のお土産だ」と差し出し雰囲気を少し和らげることが出来たように思えた。

そうした時、城島はふと思い出し「すまん、ちよつと電話するの で失礼する」と云って、窓ぎわに立ち東京にいる鑑識本部の猪熊に連絡を入れた。

城島は大阪での概況を伝えるとともに「猪熊、そっちの鑑識調査の進展で何か新たに出てきたか？」と訊ねた。

猪熊は「どうも押収した証拠物からは、事件の手口に関与するとはあまり発見できていないんだが、うちの若い鑑識官の一人が加湿器の販売店、メーカ、仕様等を調べているうちに、お前の捜査14課専従捜査班黒田と検証、考察をともにしていたところ、販売店独自のマイクロチップが本体裏面に超音波溶接機で埋め込まれていることを見つけたんだ」といい、続けて「そのマイクロチップは保障期間、ポイント、購入者カード内容などの情報を、販促用として独自に開発し実施している特殊なものらしく、今、どのような人物が購入したのか調べているところだ」と付け加えた。

城島は「加湿器がフロンを気化をさせた事件の重要な証拠品であるから、さらに充分手を尽くして調べてくれ」と頼んだ。猪熊はよく理解している様子であった。

さらに猪熊は「警視庁の特別捜査本部から、問題の加湿器を提出するよう命じられた。二日後に渡すという事で了解して貰ったので、その間にもっと詳しく調べておく、安心しろ」と自信を示した。

城島は猪熊の繊細な調査の内容を聞いた後「東京では皆忙しく俺の留守をカバーしてくれ、助かっている・・・」と云いながら席に戻り、下田に「これから直ぐに、さっき言ってくれた中小企業の経営者に会いに行けるか？」と、急かすように問いかけた。

下田と城島は直ぐ出かける準備を済ませ、下田の運転するパトカーで、東大阪市菱江4丁目にあるデンドー技研工業という資本金1000万円、従業員2名、経営者は社長の丸高（68歳）、取締役は息子（34歳）で構成された、冶金工場に向かった。

下田は道中、デンドー工業について「俺が大阪に転任して間もないとき、ある盗難事件を追いかけていて、捜査に随分協力してくれ、犯人を挙げることが出来て以来、社長と親しくしてもらっているんだ」と説明した。

話をしながら約20分で2人はデンドー工業に到着した、予め下田が電話しておいたので、社長の丸高は事務所で待機してくれていた。

下田は「元気か？ゴルフは上手くなったか？奥さんは元気か？」などと親しげに声をかけながら事務所に城島を誘導するように入っ

た。

社長の丸高は息子呼び、城島を紹介した後、年代を感じさせる応接セットに下田と城島をかけさせ河内弁なまりの早口で「電話で話したとおり、これを見てくれ、特許も取った新技術やで。この技術を生かして不景気を吹き飛ばしてやろうと頑張ってきたんや。せやけど、あかんかったんや、今回の政府中小企業支援補助対象事業として、何か不適格なところがあると思いまっか？」と所定の申請書（ダウンロードした書式）にパソコンで息子が入力した、極めて綿密に記載された文書を見せられた。

城島は技術の内容を理解することは出来なかったが、社長は「今まで誰も考えつかなかった金属微粉末の製造技術であって、実用化が進めば超硬金具、部品、エンジン部品など広い応用が期待される凄いものなんや」と自慢した。

続いて社長は「下田はん、城島はんよー、これだけの技術、特に多くの取引先の技術者、新技術機構の担当者らが、ビックリする位のええ技術やと驚いてはんに、これが今回の支援対象にならんと不適格になつてもうた。ところが誰が見ても新規性、進歩性の無い技術、事業を申請したもんが支援対象に適合、合格として支援補助金を受けているんでっせ」といかにも悔しそうに話した。

さらに社長は「わしらは、昔からやけど、特定のひも付き団体には加入せんと今まで来ている。噂によると、公自連党の唾の付いた、選挙時の票田となる団体に会員として加入している企業でないと、今回の中小企業支援金は貰えないと言ってる人もあるよ」と疑い深い目をして悔しがった。

社長の話を聞いている間、城島はあの夜行バスで居合わせた老夫

婦の会話と同じ事を聞いているような錯覚を覚えた。

社長の息子が重い口を開き「天下り法人の中小企業支援機構中央会が政府のバラマキ予算を一手に握り、傘下の団体に窓口を設け今回の対応をしたものであることはインターネットにも出ています」さらに「知る人は、この団体は公自連党の集票組織であることは分っていただろうに・・・と説明してくれた」と残念そうに言った。

黙って社長親子の話の全てを聞いていた城島は「適合、不適合と判断された企業の資料、一覧表の様なものは無いかな？」と訊ねた。

社長の息子は「あります。」と云って、直ぐその場でパソコンから分厚い資料を取り出し、念のためとして、4Gフラッシュメモリーにデータを入れ城島に渡した。

下田と城島は「ありがとうございます、大変参考になった。俺達の、精一杯の努力を傾注して調査してみる」と約束をして、仕事の邪魔を最小限にとどめるため、デンドー工業をあとにした。

；続きは次回の更新をお待ちください。

(9)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

更新日：2010・05・17

その頃、本部鑑識課では猪熊、白石が中心になって、事件の鍵を

握る加湿器の調査、分析、解析が時間を惜しむように進められていた。

城島の留守を預かる白石は「なぜわざわざ、加湿器に量販店のマイクロチップが埋め込まれていたのか？」と云う疑問を呈し、黒田刑事と三田刑事に連絡をとり「至急、メーカー及び量販店に理由を聴取して、連絡をくれ」と指示した。

一方、猪熊らは埋め込まれたマイクロチップの解析を進めていた。その結果、マイクロチップには所謂、バーコードと同じような機能を併せ持つ、顧客情報、製品のメーカー情報が詰め込まれたものであることが解りつつあった。

そうした中、黒田と三田が手分けして、量販店とメーカーにその理由を聴取してきた結果を白石警部補に連絡してきた。

量販店に理由聴取した黒田からは「量販店本社の商品開発部部長によると、このメーカーの加湿器は人気商品で、量販店の主力商品リストに入るとのこと、以前からそっくりの模造品が考えられない値段で競合量販店から販売されてきた。メーカーに問い合わせても別ルートで安く卸したことは無いとのこと、模造品だと断定した経緯がありますと云っています」続けて、黒田は「本部長はそのようにすることに危機感を持ち、消費者に判らないよう目立たないところに管理することを目的に考えた結果、商品の裏面の機能的な問題の無い個所に保証期間、ポイント、購入者などの顧客情報と製品情報を読み書き可能な、NPC電子が開発した特殊なマイクロチップで管理し、模造品と対抗しようとしたのです」と報告した。

さらに黒田は「量販店はメーカーにマイクロチップの埋め込みを依頼したが、断られたため、超音波溶接機で可能なことをメーカーに指

導を貰い、自社の加工部に依頼して作り上げたそうです」と聴取の内容を報告した。

三田刑事は黒田刑事の報告に頷きながら「ああ、一致していますね、メーカでは量販店の事情は理解しながらも製品の改造構造品質になるので、所轄官庁に報告、許可を貰うという作業が必要となり、コスト及び手続き時間に問題を生じる等の観点から、マイクロチップの埋め込みは断ったが、埋め込み要領の技術指導はしたと云っていました」と報告した。

三田と黒田の報告を聞いていた白石と特に猪熊が「マイクロチップの読み書きシステムを借りてくることは出来ないか？」と2人に問いかけた。

そのように猪熊が云った理由は、鑑識の調査と量販店のデータとを一致させたかったのである。

2人の刑事はすぐさま行動し、黒田は先の商品開発部の本部長に「すみませんが、捜査に必要ですので、マイクロチップの読み書きシステム装置を一台一週間ほどお貸しいただけませんか？」と電話連絡した。

量販店の本部長は「すぐに用意してお持ちしますと」快諾してくれた。ほどなく、システム装置は猪熊たちの鑑識課に届けられ、急遽、鑑識では読み取りを開始し、データの採集を行った。

明らかになった事件の加湿器は、東京都大田区在住の吉田一太と云う人物が購入した事になっていた。

白石警部補は猪熊の目配りから、ハツとして多分まだ大阪にいる

と思われる城島警部に携帯電話で「事件の核心の加湿器の購入者が判明しました。大田区の吉田一太と云う人物です、あとこちらの動きを指示願います」と連絡した。

受けた城島は、布施署の下田の車で新大阪駅に向かう途中で「よく調べてくれた、すまん、もうすぐ帰るので、鑑識の猪熊のところへ直行するので、待っていてくれんか？」と答えるとともに、下田警部にも内容の概略を説明した。

新大阪駅到着後、下田と城島は現状の時間を理解するように、またの再開を誓ってその場で敬礼をしあって別れた。

乗車券を買い、階段を駆け上る城島の姿はまるで獣の様に、すれ違う乗降客には見えるほど急ぎプラットホームに到着していた東京行き、のぞみに城島は駆け込んだ。

間髪をいれず城島の駆け込んだのぞみは、4時55分新大阪駅を離れた。息を整えたのち城島は、新幹線の車両ジョイントデッキに出て、白石に電話を入れ「今新幹線に乗ったから、すまんが皆で待っていてくれすまん」と誰も見ていないのに肩をすくめて恐縮しながら頼んだ。

同時に若い三田に電話を代わるように云い、三田が出ると「教えてくれ、フラッシュメモリーのデータを送りたいがどうしたら送れるか？」と端的に質問した。

三田は少し慌てた感じで「警部の携帯にはUSB端子が付いたコネクタがありましたか？」と尋ねた。

慌てたのはむしろ城島の方で「何だ、USB端子とは？コネクタ

「のついた端子とはなんだ？」と若い人なら当たり前の常識となっていることを聞き直す電子機器音痴を露呈した。

三田は少し考えたあと「警部の携帯電話の側面に長さ1センチぐらい、横幅5ミリ位の差し込める穴がありますか？」と子供に聞くように尋ねた。

城島は、手持ちの携帯を撫でまわし「キャップの下にあるのがそうか？一緒に持ってきた短いコードとその先にソケットのようなものが付いているのがUSB端子か？」と尋ねた。

三田は「多分それだと思いますので、そこへ警部が出張の時に、携帯と一緒に鞆に入れられたコードのついた端子をつなぎ、それからその端子にフラッシュメモリーを差し込んでみてください」と指導した。

その後、約30分ほどの時間を要したが、三田のおかげで何とかデータの送信に辿りつき白石、猪熊たちのところへ、デンドー工業で貰った中小企業金融支援申請の申請者と合否判定の結果リストを送信することが出来た。

城島からデータを受け取った白石から、早速、デッキで待つ城島に電話が入った「このデータは何ですか？本件と関係するものですよね・・・？」と不明なものに対する質問をするような雰囲気である。

城島は、白石に「詳しい説明は帰ってからするが、皆に、リストにある合、否の全てについて、公自連関係団体加入者か否か、フロン使用者又は使用経験者か、メッキ業者か、自動車解体業関係者か、電子部品製造業者かについて仕分けを開始してくれ」と連絡指示し

た。

指示を受けた白石が猪熊に伝え、「城島は犯人の絞り込みを考えているようだ」と云った。

白石は、この中小企業金融支援申請に応募した企業数が、全国で約34万件あることを資料から読み取って、この多数を仕分けすることがはたしてできるか？とその時思った。

とりあえず、白石らは鑑識のプリンターを使って、データを紙にプリントする一方ウィンドウズのエクセルを使用し、ペーパーレスで縦軸に申請者、横軸に公自連関係団体加入に、未加入に×をつけ、以後同様にフロンガス使用者、経験者、メッキ、自動車解体、電子部品製造の項目を作り、仕分け作業に取り掛かった。

あつという間に時計は、午後8時30分を指していた。そこに城島が「皆、すまない、エネルギーのいる仕事をしてもらって……」と帰着してきた。

誰も当てにしたり期待もしていなかったが「すまん、土産忘れた！」とバツが悪そうに城島は再度恐縮した。捜査の皆はその理由を充分推察出来ているので「お疲れ様です、指示いただいた仕分けは現在このような進み具合です」と専従捜査班リーダー城島の苦労をねぎらった。

猪熊は「これが加湿器の購入者吉田一太だ、先ほどの仕分けの中にこの人物を入れてはどうか？」と城島に伝えた。

城島もそれを容認し仕分け作業は時を惜しむように手分けして進められていた。しかし、如何せん30万件以上もの件数を仕分けす

るわけであるから、少しの人数では遅々として完了には至らず、捜査班には明らかに焦りと疲労の色が濃く出てきた。

城島らの鬼気迫る姿を見て、鑑識課からは森野をはじめ、20人弱が仕分けに協力志願し、聞きつけた捜査14課の他の事件担当捜査員15名が同様に志願してくれ、仕分けは約40人の体制となり、夜を徹して電話は鳴り響き、FAX、e mailの山を作りながらしかし正確に作業は進んでいった。

一方、警視庁長官を本部長とする多人数からなる特別捜査本部及び公安部の動きは、相変わらず組織作り、命令系統、作戦行動規律など一般では考えもつかないことで右往左往し、いまだ具体的な捜査の進展、犯行の絞り込みなど初歩的な捜査の方針決定、行動をすることの無いまま言葉だけが飛び交っていた。

それでも、事件の鍵となる加湿器の提供命令は鑑識にきており、また、いずれ加湿器の購入者と見込まれる吉田と云う人物にも捜査が開始されることは、城島をはじめとする捜査14課の専従捜査班として認識していた。

またいずれ、細かいところまでの報告を要求され、時間の経過とともに城島達の捜査はし難くなってくるだろう事は捜査員の全て及び協力者の猪熊達は感じていた。

；続きは次回の更新をお待ち下さい。

(10)

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

## 第4章 加湿器の購入者と矛盾

城島は皆が夜を徹して、仕分け作業をしていた時、それを手伝いながらも白石、猪熊が報告してくれた、事件の加湿器購入者の吉田一太のことを考えていた。

午前2時を過ぎようとした頃、城島は作業をしている総勢約40名の深夜食として、近くで24時間営業のハンバーグ店に出来るだけ大きいハンバーグと指定し、コーヒを付けさせ、作業現場に運び込ませ、休息の間をとった。

つかの間の休息時間中にも城島は、専従捜査班のメンバーと猪熊を囲み「今して貰っている仕分け作業は、すでに理解していると思うがこの事件との関連が極めて高いと思われる」と夜行バスでの出来事、大阪のデンドー工業での話、下田刑事の話をして、出張報告を兼ねた。

さらに城島は続けて「今日の朝早く、できれば吉田一太さんが出る前に、表で待ってでも簡単な事情を聞くようにしたい」とした。

休息後、城島と白石、猪熊は仕分け捜査作業を皆に任せておいて、吉田と云う人物がどのような人かを予め調査しておこうと、手分けして調べることにした。

調査の結果、以前交通違反で残っていたデータに辿りつき、東京

都大田区の葵ビレッジと云う賃貸マンションに住む34歳の男性であることが判明した。

初夏の夜明けは早く、午前4時過ぎになると辺りが明るくなりだし、カラスと思われる鳥の鳴き声が聞こえた頃、捜査のために徹夜で仕分け作業をしてきた捜査員の一人が「城島さんやつと終わりましたよ」と何台ものパソコンをランケーブルで繋ぎ作業していた多数を代表するように声を上げた。

城島は早速三田に「どうだ？中小企業支援補助金申請をした企業のうち否定されたのは何件か？」と尋ねた。

三田はすぐに「342、561件の応募者のうち30、453件が不合格で、否定されています」と返事を返し、同時に「シヨックであまりにも不思議なのですが、合格者の全てが公自連支援団体の会員で、否定された30、453件は加入団体がありません」と答えた。

三田刑事の報告は、城島が大阪のデンドー工業や夜行バス車中、下田刑事からで耳にしたことは、普通では有りえないことであるが、見事に完全な一致を見たのである。

また、三田は「否定された30、453件の内、メッキ業者は凡そですが773件程度、自動車解体業者28件程度、電子部品製造関係業者9、050件程度です」と素早く城島に報告した。

仕分け作業に参加していた捜査員達は疲れた体を休めながら、三田の城島に報告した内容を聞きながら、事件の犯人が持ったと思われる動機と犯行手段を見出すために行った仕分け作業が、極めて少数に絞り込まれたのを目の当たりにして、今更ながらに城島の鋭さ

と捜査手法の手際良さに感銘を受け聞き入っていた。

城島は仕分けに協力してくれた全員に、改めて心からの礼を云うとともに「今日からまた専従捜査班で、得られたデータを存分に活用して捜査を続けるので、皆さん今後も協力をお願いします」と頭を下げた。

午前5時過ぎ、仕分けに参加してくれた志願者の面々は「後を宜しく！頑張ってくれ」と専従捜査班の皆に言い残し其々の持ち場に帰って行った。

城島は三田に「絞り込んだ中小企業対策補助金対策の不合格者の中に吉田一太又は関連した名前があるか？」と尋ねた。

しかし、三田からは「不合格者の中には吉田一太と云う名前は有りませんでした、吉田・と云う名前では102名の該当者がいます」と答えた。

城島、白石、黒田、三田、猪熊、森野らは「吉田一太さんは絞り込んだ内容の補助金対象から否定されたグループには無いかもしれないが、念のため、加湿器の購入者には違いが無いのだから事情を聴けば繋がりが有るかもしれない」と考え、事情を聞かせてもらう目的で大田区の葵ビレッジに向かうとした。

その時、城島は「多数で押し掛けるとガードが強く出るので良くない。ここは警戒心を待たせないようにするべきだろう」と云い、続けて「ご苦労さんだが、黒田と三田ならほぼ同じ歳格好だから、相手も話しやすいと思うので、2人で出向いてくれんか？」と意思を問うた。

黒田と三田は「全くそうですね。了解しました。」と納得して、鑑識本部を午前5時半に出発した。

明るく柔らかな早朝の日差しが照らす首都高速道路は、赤灯、サイレンも不要で渋滞も無く大田区内に到着するまで何の支障もなかった。

目的の葵ビレッジ前に黒田と三田が到着したのは午前6時10分で有った。少し時間が早いので、7時少し前まで車中で待つことにした。

待機中、黒田と三田の二人は、事件犯人のイメージをお互い無言のうちに形成させていた。黒田が「出てしまうと顔を知らないの、しくじるかもしれないから少し早めに行こうか？」と三田に同意を求めた。

三田もそのことを一番恐れていたため即座に「行こう！」とドアを開き、黒田とともに葵ビレッジマンション玄関ホールに入り部屋番号を探すと、吉田の部屋は1Fの17号室で有った。

三田がインタホーンを押し、呼び出しをしたところ出てきたのは「はいだれでちゅか？」とかわいい声をした5歳くらいの女の子であった。

三田は「お父さんはいまちゅか？」と女の子に合わせるように尋ねた。その時、太く低い声で「美香、どうしたの？」という声がして、玄関に出てきたのはパジャマ姿の、小太りで160センチぐらいの背丈をした丸顔で、見るからに優しそうな男性で有った。

三田は黒田を背にして「おはようございます！霞が関PP署の三

田と申します。後ろは黒田と云います。吉田一太さんですね」と警察手帳を見せながら確認した。

少し驚いた表情をして吉田は「警察が何の用事ですか？朝早くから何かここで有ったんですか？」と多少いぶかるようなしぐさをして、三田に尋ねた。

三田は捜査に支障が無い範囲で、事件の概略を説明し「吉田さんはこの量販店で植物、室内環境用の加湿器を買われましたね。」と単刀直入に質問した。

吉田は「ええ、購入しましたがでもそれは新品のままうちの会社関係先の商工会に差し上げました」と云い、事件の内容を知り驚いた様子を示した。

三田は続けて「商工会はどちらの？」と問い直し、「どなたに渡されましたか？」と重なるように尋ねた。

吉田は「大田公自連電化商工会です。その誰だったかは忘れませんでした」と少し戸惑った表情をして云った。

黒田が「吉田さんは公自連党支援の大田公自連電化商工会の会員ですか？」と尋ねた。

吉田は「ええ、僕はその商工会の会員ですけど、なにか？」となぜか少し胸を張って答えた。

三田は「吉田さんは、フロンガスを取り扱われたことがありますか？」と尋ねた。

吉田は少し考えるように間を置いた上で「フロンとは、あの空調用に使われるフロンのことですか？・・・使用も取り扱ったこともないように思いますが」と多少伏し目がちに答えた。

黒田は「先ほど、うちの会社とおっしゃいましたが、会社を経営されているんですか？」と尋ねた。

吉田は少し慌てたように「いや、会社は親父の会社で、僕はその会社で取締役製造部長をしています」と、加えて「吉田電化と云う電子部品及び装飾メッキをしている会社です」と答えた。

三田は「お父様のお名前は？吉田さんのご家族は…奥さまもいらっしゃる？」と雰囲気を変えるように質問した。

吉田は「親父は吉田敬一と云いましたが、2月に亡くなりました。今実家は母の君江一人です。また、内は妻の芳江と僕と美香の三人暮らします」と答えた。

三田は「失礼ですが、お父様はご病気で？」と問いを重ねた。

吉田は「あまり申し上げたくないことなのですみません」とうつむいて答えた。

黒田と三田は目で合図し、これ以上の質問はこの時点では不要と判断し「ありがとうございました。立ち入った質問を致しまして失礼しました」と丁寧に挨拶を残し、吉田の住まいを後にした。

三田と黒田は一つ一つを確認しあいながら、一部始終を霞が関P署に帰っていた城島と白石に報告した。

報告を受けた城島はしばらく考えてから「そうか、本人は予想に反して、公自連党の支持母体関連の商工会会員なのか・・・？、では、聞いた話の全部のウラをとることが必要だな」と白石以下黒田、三田に促した。

休む暇もなく、三田は吉田の勤める会社の調査に、黒田は大田公自連電化商工会へ、白石は大田区役所に吉田の証言の確認に走った。

一方、城島は中小企業支援事業の申請と合否のリストと、吉田電化の申請の有無および結果を見つけることが出来るか丹念に調べを開始していた。

そこに突然、警視庁長官を本部長とする特別捜査本部の毛利副長から連絡が入り、本部へ出頭して捜査経過を説明せよと、独走は許さんぞと云う雰囲気が伝わる嫌味を交えた表現で命令を受けた。

城島は「いよいよ来るべきものが来てしまったか・・・。」と独り言を云いながら歩いて2分の警視庁に向かった。

続きは次回の更新をお待ちください。

( 1 1 )

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

更新日：2010・05・20

警視庁に到着した城島は、インフォーマーションカウンターで馴染みの受付嬢に、おどけた表情で敬礼をして「毛利副長に面会に参りました！」と告げた。

そこはなれたもので、受付嬢も「かしこまりました、只今毛利副長に連絡を取りますので、少々お待ち下さいませ」と城島を上回るような緊張ぶりの対応を見せ、その直後には、にっこりと笑みを浮かべた。

そのあと城島は、警視庁とは相応しくないとと思う金ぴかの内装工レベーターで、12階の副長室へ案内なく一人で向かった。

その表情は、先程とは雲泥の差があり、硬く厳しいものであった。

ノックをして、内部の了承の声を聞いた上で、副長室に入った。

毛利は奥の机で何かの仕事をしているらしく「ご苦労さん、前の応接でちよつと待ってくれ」と云ったので、城島はその通りに従った。

約3分経たないうちに毛利は城島のところに歩み寄り、先程の電話連絡の雰囲気とは全く別人のように、顔を緩ませながら「すまん、すまん、忙しい中をすぐ来てくれて、ありがとう」と云いながら応接に腰をかけた。

城島が咄然としていると「さっきは長官のいる本部長室から電話していて、周りに大勢のキャリアー共が聞いており、捜査の何もできないのに偉そうにしている者ばかりで、お前さんに変なことを云ってすまなかった」と続けた。

毛利の言葉を聞いた城島はフーと気を吐くように安心し「ご連絡を頂いたご用件は、捜査の内容についての説明ですか？」とはつきりした声で尋ねた。

実はと毛利は城島に「お前さんとこの上野捜査課長とは長く古くからの友人で、酒はもちろん悩みの打ち明け友なんだよ」と前置きしたうえで「この事件で、お前さんをはじめ霞が関PP署の専従捜査班が昼夜を問わず捜査に邁進し、事件で有ること、凶器がフロンで加湿器が使用されたこと及び動機については確定はしていないよ」のだが、中小企業支援補助金の可否のアンバランスに有るのではと絞られていると課長から今日聞いた」とねぎらいとも称賛とも受け取れる表現で事実確認をした。

毛利の話しを聞いていた城島は「副長にも、俺と猪熊のような仲間がいたんだな・・・」と声を出さずに理解した。

続けて毛利は「動機と考えられる中小企業支援補助金の可否のアンバランスについて詳しく教えてくれ」と城島に頼んだ。

城島は毛利に対する先入観を解除し、中小企業支援補助金の可否のアンバランスが、なぜ事件と関与していると考ええる根拠となったかを堰を切って詳しく説明した。

そうした話をしている間に、ポンと膝を叩いて、毛利は「この件は、公自連党総裁、つまり殺害された霧谷首相が選んだ、この組織の長が本部長として構成された本庁の特別捜査本部では、今後の捜査に問題がでそうだな」と、警視庁長官の名前を出すことなく表面的な表現として城島に語りかけた。

城島は「いかにも！その通りです」と口に出すことは無かったが、

肯定するように深く頷いて見せた。

副長の毛利は意を決したように「よし分かった、それでは、お前さん達は続けて今の捜査を続行してくれ！もし、本庁の特別捜査本部から邪魔が入るようなことがあれば、俺が体を張って阻止する。」と目を大きく見開き城島に伝えた。

鬼に金棒とはこのことである。警視庁特別捜査本部の副長とは、本部長のすぐ下の実務を切りまわす責任者なのである。

城島は「ありがとうございます！では先を急ぎますので失礼して宜しいでしょうか？」と尻をモゾモゾさせて、毛利に伺いを立てた。

毛利は「困ったこと、必要なことが生じたときは遠慮なく連絡してくれ」と云って、専用の携帯電話番号を城島に伝えて「また会おう」と握手の手をさしのべた。

丁寧に一礼をして、城島は副長室から退室し、一階ロビー、インフォーメーションカウンターの受付嬢と目で挨拶を交わし警視庁の外に出た。

外は興奮気味の城島の体をより熱くする初夏の熱気が吹き抜け、早くも蝉の鳴き声が聴こえ出していた。

所轄の霞が関PP署の階段を駆け上ろうとした時、捜査に出ていた白石から「警部、区役所で調べてきたところ、吉田一太の父親は社長の吉田敬一で間違いありません。会社も吉田電化で間違いはありませんでしたが、この不況で、赤字続きの様子であつたらしく、ここ二、三年法人税、事業税などの納税がされていませんでした。それと役所ははっきりと云わないのですが、吉田敬一社長の死因は

どうも病気ではないようです」と連絡があつた。

城島は「ご苦労さん、じゃあ俺は皆が帰るまで、中小企業支援補助金申請書リストから吉田電化、社長吉田敬一で検索してみる」と白石に伝えるとともに「今の件、三田と黒田にも連絡しておいてくれよ」と云い、捜査１４課に戻り、保管してある当該申請書リストと吉田電化及び吉田敬一を照合する作業を開始した。

多数の申請件数にもかかわらず、五十音別、業種別で仕分けをしてくれていたため、照合は簡単で有った。

「有った！」城島は一人で叫んだ。

当該申請書リストの不合格企業に、吉田電化／社長 吉田敬一と記載されていたのを確認したのである。

記載されたリストを食い入るように見ながら「しかし？」と城島は一人ごとを云いながら「確か、息子の一太は大田区の公自連党支持母体の大田公自連電化商工会の会員で無かったか？」なのに、なぜ「不合格になっているのか？」と疑心暗鬼になった。

そう思いながらも、先程白石が報告をくれた中で、社長吉田敬一の死因がハッキリしていないという事が頭に浮かび、白石に「おい、すまんが、吉田電化の所轄署は大田北署だな、帰りによって死因を調べてきてくれ」と携帯で電話指示した。

間もなくほぼ同時に、吉田電化を調査した三田と大田公自連電化商工会を調査した黒田が城島の元へ戻ってきた。

三田は「警部、吉田電化はフロンガスの内フロン１２と云うもの

を、を洗淨乾燥用として約17年前まで使用していたそうです。また最近是不景気のあおりで売り上げが随分下がっていたそうです。」さらに三田は「そうした中、社長の吉田敬一は、従業員や家族に謝罪の遺書を残し首を吊ったらしいのです」とあまり深くない概略の報告をした。

待ちきれない様子の黒田は「大田公自連電化商工会では吉田一太は間違いなく会員です」としましたが、詳しく聞くと入会は今年の3月だという事が解りました。例の加湿器の件を糺すと、その場にいた全員が「聞いたことが無い」と答えました。

また、吉田一太の商工会での役割を聞きましたところ、「新しく入会した人には書類の運搬等の簡単な配送業務などから行ってもらっています。」とのことで、丁度帰る間に吉田電化の社長吉田敬一のことを白石警部補から連絡を受けたので、「吉田電化は法人会員か？、吉田敬一は個人会員か？」と調べてもらったのですがどちらも該当しませんでしたと汗を流しながら報告した。

少し頭を冷却しようと城島が云わんとして、ポケットから署内の格安自販機で全員のお茶を買おうと100円玉を5枚取り出し、部屋を出ようとした時、そこにまん良く白石が帰ってきた。三田が気をきかせて全員分のお茶を買って戻り、白石の報告は後回にして、一息つくことにした。

城島は「オイオイ、今日も窓から見える電信柱が朝日に輝いたり、暗い夕闇に消えていこうとしているよ」と皆の気持ちを休ませるように大きな声で話しかけた。

一気にお茶を飲み干した後、10分も経つか経たないうちに全員がもとの顔つきに戻り、調査結果の取り纏めと整理にかかった。

中小企業支援補助金申請期限は昨年の秋、審査の主体は施策を一手に引き受けた商工中央会、審査員は不詳、申請は約30万件、合格は約27万件、不合格は約3万件、公自連会員企業は全て合格、会員外企業は全て不合格、浮かび上がった加湿器の購入者の吉田一太は大田公自連電化商工会の会員、入会は今年の3月、2月に亡くなった父親の死因は自殺、当該申請で不合格に吉田電化の名前がある。

等と整理するうち、大田北署に立ち寄った白石は「吉田敬一の死因は首吊り自殺で従業員や家族に遺書を残しており、内容は今回の不況対策を当該申請に期待したが不合格となり、万策尽きたと記されていた模様」とデータの補充をした。

調査の事実を列挙した結果、しばらく考えていた城島は、「吉田一太はなぜ、公自連党の支持母体の商工会に3月になって入会したのか？父親は入会していないのに・・・、なぜ、父親は自殺したのか？、この辺りが事件の鍵を握っているように思えてならない。」とぶつぶつと何時もの城島らしくない弱々しい呟きをした。

恐ろしいことで、専従捜査班のリーダー城島の元気の無い呟きが全員に伝わり、何時しか4人の捜査員は、一人が机にうつ伏せに、一人は机に足を乗せ椅子に反り返って、一人はソファーに横になり、城島は壁に体を斜めに押し付け何時の間にか深い睡魔に吸い込まれていった。

何時間経過しただろうか、突然、大きな鼻声でたたき起こされた、立っていたのは猪熊だった。「オイ、皆、深川のうな重を買ってきただぞ、すぐ食べないと味が落ちるよ」と鼻声の猪熊は目覚まし時計のような声を張り上げた。

城島は「どうした！その鼻声は？風邪か？」と聞いた。「新型インフルエンザに罹ってしまったかもしれない」と猪熊は云ったが、皆に元気を与えるように署内全てに聞こえそうな声を張りあげて、各捜査員の周りを次々に回った。

深川のうな重はそれは見事な味で、一同目が覚めた。

城島は猪熊に「早く帰って休め、先は長いぞ」と猪熊の体を気遣って云ったが、猪熊は「何のこれしきと昔の武将のような訳のわからないことを云って、それより今日の警視庁の方はどうだった？」と聞いてきた。

城島は毛利副長とのやり取りを「すまん忘れていたわ、コレコレしかじかと」猪熊及び全員に伝えた。

再び捜査員達に活力が戻り、推理と事実とを照合する捜査会議が始まり、深夜に至る会合を精力的に開始していた。

何度も繰り返し考えるに従いまとまりが出てくるもので、漸く明日からの捜査の展開方法を仮決定することが出来た。

まず、三田刑事と黒田刑事の合同案は「昨日の吉田一太が供述した内容はどうも嘘で固められているようです。任意同行を求めて事実関係、背後関係を調べるべきではないでしょうか？」と述べた。

事件の専従捜査員は猪熊を除くと正式には4名しかいないので、吉田一太が応じれば、捜査員2人が話をし、2人がハーフミラー越しに挙動を観察することに予定したため、明日は午前を聴取に充てることとした。念のため猪熊には体調が良ければ鑑識として立ち会

ってもらったこととした。

翌朝7時少し前、捜査員の三田と黒田は吉田一太の葵ビレッジ17号室に向き、捜査に影響しない程度に事情を説明し、任意聴取に応じてくれるよう申し入れた。

吉田は少し困惑とろたえるところが見受けられたが、素直に捜査員の申し出に従い、出勤前の作業服のまま捜査員の車に乗り込み所轄の霞が関PP署に着いた。

；続きは次回の更新をお待ちください。

(12)

[戻る top](#)

[戻る \(index\)](#)

[戻る \(sub0021\)](#)

更新日：2010・05・21

## 第5章 犯人の特定

到着した吉田を案内したところは、城島の配慮で、取り調べ室ではなく、警察としては豪華な内装をした参考人事情聴取室で普通の応接室の様な部屋で有ったが、壁の一部は内部の様子が窺がえるようにハーフミラーがはめ込まれた構造をしている。

吉田は少し硬い表情をしていたが、間もなく部屋に入ってきた城島が「吉田さんにはわざわざお越しいただき、捜査にご協力を頂くことをご了承下さり、まことに有難うございます」と丁寧に挨拶を

したところ、やっと表情が和らぎ、安堵した態度を示した。

城島はすぐに「後はすみませんが、三田刑事と黒田刑事が失礼なこともあるかもしれませんが色々とお尋ねしますのでおわりの範囲で結構ですので、お答えください。」と云って部屋を出た。

間もなく黒田刑事が入室し挨拶をしたのち、記録を取るため、少し離れたところの机の椅子に座りスタンバイした。続いて三田刑事がアイステイを持って入室し、「吉田さん、アイステイで宜しいですか？」と笑顔で問いかけながら、吉田の正面に座り、「早速ですが、質問をさせていただきますね」と云った。

吉田はすでにリラックスした様子で「どうぞ僕でよければ答えますので、なんでも尋ねてください」と気軽に雰囲気で答えた。

早速、三田は「購入された加湿器に、顧客管理用のマイクロチップが埋め込まれていたことを知っていましたか？」と尋ねた。

吉田は「全く知りませんでした、プライバシーの侵害ですよね」と云った。

三田は「事件の凶器に使われたのが、吉田さんの購入した加湿器によるものとは知らなかったのですか？」と微妙な質問をした。

吉田は質問が終わるや否や「そんなこと、僕は全く知りませんでした」と落ち着いた表情で答えた。

部屋の外側では、ハーフミラーを通して城島は吉田の対応ぶりを観察していた。そこに「すまん少し遅刻したな」と猪熊が鼻声を隠しながら城島の肩をたたいた。

城島は猪熊に「今始めたばかりだ、リラックスさせて三田に最初、質問させている」と云いつつ、目は室内の吉田から離さなかった。

続けて三田は「あなたは今年の3月に、大田公自連電化商工会に入会されましたが、何かの理由が有ったのですか？」と聞いた。

吉田は少し考えるような間を置いて「親父が亡くなった後、僕が会社を切りまわさなければならぬので、時の政権党の支持母体の商工会に入っておいた方が何かと有利かと思ったので・・・」と答えた。

三田は「では、その商工会に入れば、一般に比べて有利なことがあると思っただけですね、具体的にどんなことが有利になるとお考えでしたか？」と質問を関連付け続けた。

吉田はまた少しの間考え「具体的なことは分かりませんが、業界ではその方が良くよと云う人が多いのです」と答えた。

さらに三田は「どんな人が勧めたのでしょうか？」と聞いた。

吉田は「大田区選出で、公自連党所属の衆議院議員松田さんの上田秘書さんや業界組合などから聞いておりました」と述べた。

三田は「公自連党の松田議員の秘書とはお知り合いですか？」と続けた。

吉田は「いえ、業界組合の理事から、あることで紹介されたことがあるのですが・・・」と少し濁すように答えた。

三田は話を切り替え「ところで、お父様は商工会やその他の団体に加入されていませんか？」と尋ねた。

吉田は「親父は昔風の職人気質で、そうゆう付き合いは苦手だったと思います」といい、「業界の組合にも入らなかったんです」と続けた。

三田は「ところであなたの会社では、今回、昨年の秋に募集された中小企業支援金融補助金に応募され、その結果は残念ながら駄目でしたな」と確認するように質問した。

続けて「どんな内容で応募されたんでしょう？、駄目になるような内容を応募されたのですか？」と三田は答えを求めた。

吉田は「昨年の春に特許を取得した高効率LED照明機器の電子部品製造技術で、僕は、画期的な技術であると思いましたか・・・残念でした」とうつむき加減になって、悔しそうな表情をして話した。

そこで三田は「それ程自信のある製造技術がなぜ合格しなかったと思いますか？」と多少誘導するように尋ねた。

吉田は云った「親父の話では、どうも今回の、中小企業支援金融補助金募集は、我々を対象にしていなかったのではないか？」と云っているのを聞きましたと。

この時、室外のハーフミラー越しに内部を観察していた城島と猪熊は、吉田が頬を痙攣させるのを見逃すことは無かった。

三田は「そのあと、2月にお父様は自殺と云う道を選ばれたので

すね。悔しいですね。宜しければお父様の遺書を見せていただけませんか？」と同情するように尋ねた。

吉田は首を大きく左右に振り涙ぐみながら「それはだめです。見せられません！」とやや声を荒げて拒否した。

その時、三田の肩を合図するように黒田がたたき、役割を交代することにした。

黒田は「ごめんな、立ち入った事を聞いて、しかしこれは事件と重要な関係があるので、聞いているのですから我慢して下さい」と宥め「それであなたは公自連の組織の一部に関与しようとしたのではないのですか？」と率直に聞いた。

吉田はその問いかけに対し「・・・・・・・・・・・・・・・・！」と何も答えようとしなかった。

室外で状況を見ていた城島と猪熊は、ここぞと室内に入り、三田、黒田と交代することにした。

城島は「吉田さん、我々はあなたの悔しさがいかに大きいものか、この事件の捜査をしていて、地方でも同じような事例が多数有ることを体験してきているので良くわかる」と誠意をこめて話しかけた。

吉田はそれでも「・・・・・・・・・・・・・・・・！」と何も答えないままであつた。

城島は「中小企業を助けるなどと嘯いて、自分たちに都合のよいもの達に金をバラ撒くなんて、許せないよな」と違法すれすれの誘導を試みた。

すると吉田はかばそい声で「親父はそのことを知って、自分の不器用さを恥じ、幻滅を感じて……」と伏し目がちに述べた。

そのこととは、政権党である公自連党の選挙集票組織の団体に加入していなければ、バラマキ予算の恩恵は受けられないという意味であり、それに直面した者しか解らない悪意の政策を指ししめしているのである。

城島は吉田の任意聴取において、事件は中小企業支援の名を借りた、集票政策が原因して起きたものであると確信を持った。

ならばなぜ、当該補助金募集期間を過ぎた今年の3月に大田公自連電化商工会の会員になったのか、との疑問は残る様に思えるが、あえて城島はそれ以上に立ち入ることをしないで、この日の事情聴取を終了させ、吉田を解放することを選んだ。

専従捜査班4人全員と猪熊の計5名で礼を述べ、吉田を所轄署玄関まで送り、黒田の運転する車で、吉田の会社／吉田電化に送りどけた。

署内の時計を見ると午前11時を少し回っていた。

そこへ、捜査14課の上野課長が「オイ、城島、今日からお前達の正式な応援に、須田刑事ほか5名を出すので頑張れ」と毛利副長と話がついてると云わんばかりの表情でやってきた。

「ありがとうございます！……必ず解決させて見せます」と専従捜査班全員と猪熊までが、喜び受け入れた。

その二、三分後には、課長の云った通り、捜査14課でもベテランの須田刑事、ほか5名の頑強な体つきの刑事が城島の元にやってきた。

早速全員で朝礼ならぬ昼礼を兼ねて、其々が、今までの捜査状況を綿密に説明理解し、猪熊を入れると11名の体制となったので、2名一組で手分けして捜査に臨むこととした。

城島はまず、吉田一太の供述の裏取りに3組6名を充てることにした。

第一組には「吉田一太と公自連党松田議員の上田秘書とのつながりと他の議員秘書との関係の有無捜査」をするよう指示した。

第二組には「当時の霧谷首相警備担当SPでアルカリンホテルに常駐していた者のリストと外部から差し入れられた物品と送り主の氏名捜査」を命じた。

また、第三組には「大田公自連電化商工会での吉田一太の行動、加湿器の行方捜査」を命じた。

城島とその他は吉田一太の父、敬一氏の死因確認と遺書の内容確認捜査及び吉田電化の最近の状況把握などの周辺を捜査することにした。

いずれも、本日午後五時には終了し、捜査会議は午後六時より行くと決定し、各捜査員は一斉に目的に突進していった。

城島と猪熊、白石を専従捜査班に残し、残り2名の捜査員は先行する形で彼らより先に捜査を開始するため、大田区の吉田電化に向

かった。

皆が捜査に出向いてから大事な忘れものに気付いたのは白石だった。「皆、吉田一太の顔を分かっているんだろうか？」と心配そうに云った。

そうだそうだと城島は慌てて「すまん、これが吉田一太の顔写真だ。でももう皆いない、どうしよう？」と助けてくれと云わんばかり、子供のように猪熊、白石の顔を見た。

「そうあわてなくても大丈夫」と、さすがに理工系出身の猪熊である。すぐに写真をスキャナーで画像データに変え、電子メールで捜査員全部の携帯に画像を送信した。

電子音痴の城島は、その素早さに感心し尊敬のまなざしを猪熊に送った。

城島達が吉田の父、敬一の死因のほか遺書の内容を確認するため、向かったのは、城島の勘で、大田区で現在一人住まいをしている母の君江宅で有った。

城島の勘の鋭さは電子音痴とは思えないほど優れており、息子の一太が拒否した遺書の内容はたちまち把握出来ることになった。

君江宅を訪れた城島ら3人は身分証明をした後、先ず丁寧に「御仏前に手を合わせて下さい」と願い、冥福を祈願してから、事情を説明し遺書内容を見せてほしいとお願いした。

君江は少しためらってから「主人の納得できなかった事を少しでも判っていたためにならお見せします」と云って、仏壇にしま

いこんだ敬一の遺書を城島に渡した。

猪熊は「秘密の保持については、私ら警察官が厳守し、他用しませんので写真で撮影してもいいですか？」と尋ね、君江の了承を得て、デジタルカメラの接写機能を使用して文書を写し取った。

敬一の遺書を読んだ城島の目からは大粒の涙がこぼれ落ち「奥さん大変でしたな」と云うのが精一杯であった。

遺書にはアメリカの大手証券会社破たんをきっかけとした、世界恐慌ともいえる不況の煽りを受け、会社の業績が落ち込んでいた時、政府の中小企業支援事業として実施された巨額の補助金応募者募集に応じ、先に発明した技術の実施を目指したいとして努力したが、結果は自社と自分が政府を構成している公自連党の党員でもなく、支持団体の会員でも無いため不合格になり補助金がおらなかった。これは色んな人から聞いてもそうだと知り啞然とし万策尽きた。と原因の一部について記していたのである。

城島が涙したのは、これまでの捜査の過程で同じ事が原因して悲惨な結果を選択することになった中小経営者の事例を見てきたからで、明らかに現在の世の中を象徴した出来ごとに対する悔し涙と猪熊達はみた。

彼らが時計を見ると、すでに午後4時20分を過ぎていた。急ぎ礼を述べ、君江宅を後にし所轄の霞が関PP署に戻ることにした。

通勤時間の重なりを交わし、午後6時前になんとか所轄に到着し、猪熊に頼んで写した遺書の文書をコピーし捜査会議を開くため、各捜査員の帰りを待った。

各捜査員は全員遅刻することなく帰着することが出来、すぐさま捜査会議は開かれた。会議の席中央には上野課長も出席してくれ、成り行きを見守ろうとしていた。その左側に古寺の仁王像のような顔をした城島が着席し、右側に猪熊とその横に白石が着席した。

各刑事は城島らを正面に見据えてテーブルに着き、会議は始められた。

冒頭、予断を入れさせてはまずいと思い城島は「では第一組の捜査の結果を報告してくれ」と先行報告を求めた。

第一組、鶴田刑事、小中刑事のコンビからは「自連党松田議員秘書上田と面会し、吉田一太との関係を尋ねたところ、業界組合理事からの紹介で1月頃に一度会って話をした。」「内容は父親が経営する会社が中小企業支援事業の補助金申請の応募をしたが、不合格になった。特許もとって期待される技術で応募したのになぜだろうか？と相談に見えたので、大切な理事長の紹介でもあるので、霧谷首相の小田秘書が良く分かっているからと、その場で電話して小田秘書に面会できるようにしたと云っていました。」と報告した。

第二組、三田刑事、黒田刑事のコンビは「ご存知のSP基屋さんに会い、当時の警備状況と、常駐警備担当を聞いたところ、丁度基屋さんの横にいた桧山と云う若いSPが、私ですと申し出たので、事件前の出入り及び贈り物の搬入者、リストの有無など詳細に尋ねました」、「搬入者リストの正確なものはありませんが、搬入訪問者に品物と送り主の名前を書き込んで貰ったのは有りますとのことでしたから、まだ調べてないのですが、それを頂いてきました」と報告し、コピーを配布した。さらに「猪熊警部から送ってもらった吉田一太の写真を見せ、来たことが無いかを尋ねましたところ、ああ、何とか商工会の理事長からの届けものだと持ってきた若い人に

似ています。確か、箱のようなものでしたと云いました」と報告した。

第三組、平野刑事、平田刑事のコンビは「大田公自連党商工会では、今年の3月に入会を希望され、会員になってもらったんですが、仕事を覚えるのには時間がかかるので、この前も申し上げたのですが、しばらくは配送業務など簡単な事をお願いしていました。また、加湿器を提供してくれたとのことで、その後もここにいる会員に聞いたのですが誰も知らないんです。と云ってそれ以上に進まなかった」と報告した。

もうひとつのコンビ、小川刑事と小坂刑事は「城島警部、白石警部補、猪熊警部に先行するよう指示され、吉田電化に行き、会社の状況を総務の椎さんに尋ねました。昨年から仕事量は減り続け、ご覧のとおりです。社長が亡くなって、今は取締役の一太さんが懸命に経営努力をされていますとのことで、深くは時間の都合で知るところとは出来ませんでした」と少ない捜査の時間を悔やむような報告をした。

各組の報告が終了した後、城島は白石に頼み、自分達が訪ねた一太の母、君江が提供してくれた遺書の内容を、全員に配布し、城島は見たこともない怖い顔をしながら「一太の父、敬一が記しているように、自殺の間接？いや直接かもしれない原因は、政府を構成する公自連党の内閣総理大臣が、中小企業支援対策としてバラ撒き予算を組み、中小企業支援金融補助金募集として広く我が国全域に公募したことが関係しており、問題は公自連党の集票組織に加盟した企業は採用され、そうでない企業は門前払いのように弾かれる構造となっていたことが事件の始まりで、特に審査は誰がしたのか不明で有り、補助金の合否決定権は公自連党の支持母体である中央会が権限を行使したもので、まじめに応募した企業は不可解な思いを持

つたに違いは無い。」と、夜行バスの老夫婦の事例、TV報道による地方の例、大阪の例を取り混ぜて説明した。

尚も城島は「本日までに確定的な証拠があるのは、犯行手口からして、フロンガスを加湿器で気化させ、殺害に及んでいる。そして動機は、先程俺が云った中小企業支援金融補助金の合否判定のアンバランス、ご都合主義の被害者とも思われる恨みで有ると思う」と顔をさらに赤くして仁王のように報告した。

会議を静かに聞いていた捜査14課課長上野は突然立ち上がり、「城島、お前犯人を見つけたな!？」と城島を鋭い目で見つめた。

城島は皆に確信を持って云った「犯人は吉田一太である!」と

「明日の朝逮捕出来るように手続きお願いします、逮捕後取り調べでさらに証拠を積み増すようにします」と、城島は上野課長に願ひ出た。

何を思ったか、上野課長は「よし、俺も一緒に出向くので同行させてくれ」と城島に云った。

明日は風邪をひいている猪熊を休ませ、白石には、三田と黒田が相手したSPの桧山を取調室に控えさせ、面トウシの準備をしておいてくれと頼んだ。

こうして白熱の捜査会議は午後10時過ぎ終了し散会した。

城島と猪熊は会議の後、署の前でタクシーを拾い、上野にある二人の行きつけバーに向かった。車中、猪熊は明日の処理が、城島にとっていかに苦しく辛いものになるかを充分に察知していた。だか

ら目的地に着くまで無言を通した。

；続きは次回の更新をお待ちください。

( 1 3 )

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

更新日：2010・05・22

## 第6章 涙で濡れた逮捕状

城島と猪熊はお互いに言葉を交わすことなく、いつも二人で行く上野駅近くのウイスキー専門バーに入った。

カウンターにかけると、馴染みのソムリエが笑顔で二人を迎え、黙ってダブルのバーボンウイスキー・オンザロックを差し出した。

グラスを「お疲れ！」と云うように合わしあい、一気に飲み干した。

城島と猪熊はやっと「少しきつかった、疲れたな」と会話が出来た。

猪熊は「明日は早いんだろうな？酒が残るとやり難いからもう帰るつか？」と何時もなら少なくとも数十杯のグラスを空ける飲んべーが城島の明日を考えてそつと言った。

城島は既に明日の朝を見つめていたので、云われるがままに「うん。」と相鎚を打っていた。

ソムリエが驚いた顔をしたのも構わず、二人はそそくさと涼しくなった街路に出て、上野駅前で別々のタクシーに乗り、猪熊が「明日、確り頼む、後から捜査課に顔をだすよ」と云ったことだけ頭に残し、家路を急いだ。

城島が帰宅したのは午後12時を少しまわった頃であつたが、女房が沸かして待ってくれていた熱めの風呂に飛び込み、身も心もリフレッシュさせた。

不思議なことにその後、今までに無く寝つきよく深い眠りにつき、午前4時にセツトした目覚まし時計のかん高い音で起こされるまで夢を見ることも無かつた。

いつも城島の姿を見ていて分るのか、女房は今日に限りいつもと違う、グレーのストライプが入った濃紺、洗濯したてのスーツを、同じ模様のネクタイとともに差出し、簡単な朝食を用意して、いつもより元気な声で「行ってらっしゃい！頑張って」と城島を送り出した。

こうして城島が所轄の霞が関PP署に到着したのは、午前5時半ごろであつた。驚いたが、署の前にはすでに上野捜査課長が小さいポーチを持ってたたずんで城島を待っていた。

城島は「恐れいりました、待たせて申し訳ありません」と敬礼をして礼儀を示した。

上野課長は「逮捕状は昨日、時間外手続きで裁判所から貰つてき

たので、これをお前さんに預ける」と城島に渡した。

ではと、城島は上野に声をかけ、城島の運転で上野課長と二人で、吉田一太の住む葵ビレッジに向かった。

葵ビレッジに到着したのは午前6時半を少しまわった頃であった。城島と上野はそのまま吉田の部屋に向かい、インターホンを鳴らした。

「はい！少しお待ちください」と云って顔を出したのは吉田一太本人であった。

彼は、理髪し、スーツを着て、必要な小物を入れるバックを持った格好で出てきた。その姿は優しく人のよい好青年に見え、城島たちとそのまま出かけるという雰囲気を示していた。

まるで彼は、城島が今朝にやってくるのを知っていたように、身支度をして待っていたとしか考えられなかった。

城島は「そのままドアを閉めて、表に出て来て」と家人に分らぬよう配慮して、小声で吉田に指示した。

吉田がマンション通路へ出てきたところに、城島は上野から預かった逮捕状を、通常の逮捕時には片手で逮捕状を握り、突き出す様にして相手に提示するのが普通であるにもかかわらず、この場合は、両手のひらを空に向けこれに逮捕状を乗せ、あたかも賞状を手渡すときのようにして、逮捕状を見せた。

しかも、昨日の捜査会議で見せていた仁王様のような恐ろしい顔はなく、優しい観音様のような顔で吉田を見ながら、殺人容疑であ

るにも関わらず、簡単に逮捕容疑説明と逮捕時間を通告した。

城島がこのように配慮する事は今までの事件にないことで、ここまで城島は吉田一太の心情、彼の父親吉田敬一の悔しさ、その妻君江の心情を痛いほど感じ、接してきたからで、城島は苦しみぬいた相手を逮捕しなければならないことへの苦しみ、同情があふれ出していたのであった。

吉田も初めて、今までの苦しみを理解してくれた人がいることが分り、深い感謝の念をいただいていたのである。

城島と吉田一太は互いに逮捕状を握り合いながら、遂に感極まって、大粒の涙を流した「ぼたり、ぼたり……」逮捕状は両者の涙で濡れた。

逮捕に立ち会っていた上野課長はさすがに涙こそ見せなかったが、両者の肩を優しく強く抱きしめ「家族が出てこないうちに行こう」と促した。

手錠をはめることをする必要もなかったし、そうする気も城島と上野にはなかった。

吉田を後部座席に乗せ、運転の城島と上野は前席に座り、赤灯、サイレンも使用せず、通勤で混雑する中を走りぬけ、所轄署の霞が関P.P署に着いたのは午前9時をまわっていた。

所轄には既に白石警部補が連れてきたS.Pの檜山が待機していた。

檜山は城島と上野がつれてきた吉田を見るや「彼です。箱のような届け物を、大田公自連電化商工会理事長からですとしてきたのは・

・・・」と面トウシをするまでもなく証言した。

かたちばかりの取調室に案内された吉田一太は、捜査員が供述聴取するまでもなく、自ら事件の全容を話した「どうしても殺害してやりたいと思った相手は、公自連党総裁・首相秘書の小田でした、彼女は中小企業支援金融補助金の選考及び合否決定権を一手に握り、集票組織会員を合格とし、他は否定することを、政策を利用して行ってきたのです」、吉田は続けて「公自連党松田議員秘書上田の紹介で会った小田秘書本人が、・・・だからお宅さんの会社が不合格になってしまったのです、申請の時に支持団体会員になってくれていたら問題は全くなかったのに・・・と説明した」と一気に供述した。

吉田は「そのため、職人氣質の父は組織がなかったので、否定され、自殺の道を選んだのです」と涙ながらに話した。

さらに、「霧谷首相は公自連党の再選維持を確実なものとする目的で権力を使い、自分達の利益のために、自分達の支持者だけが有利となることを考え、秘書の小田と一緒にやってこの悪意に満ちた政策を、意図して不公平が生じる様にやってきたのです」と拳で取調室の机を叩き供述した。

「殺害方法については、フロン１２が会社にありましたので、これを水と称して、加湿器にいれ持ち込むことで、使用すると気化して心不全、呼吸困難になることは以前から知っていました」といい、続けて、「僕が、大田公自連電化商工会に入会したのは、加湿器を運び来むに怪しまれることがないと思ったのです」と付け加えた。

覚悟を決めて自ら説明した吉田一太の姿には何の迷い、不安も感じられなかった。

取調べ室の様子を黒だかりのようにして外部から見ている、専従捜査班の面々は、自分たちがしてきた捜査の結果と一致していたことに改めて驚き、リーダー城島の捜査勘に敬服した。

次々と明らかになる吉田の供述に基づき、全捜査員は城島の指示で、そのつど裏づけ捜査、検証作業を進めた。

取調べは昼食、夕食をはさんで深夜まで進められ、犯人吉田も誠実に供述し全面自供した。

その結果、裏づけ捜査は全ての事柄について一致をし、事件はその日の深夜に全面解決した。

取調べの過程の昼ごろ、城島のもとに、風邪がより重くなり40近い熱を出しながらも、駆けつけた猪熊が、犯人吉田に聞こえない壁の外から「悔しかったろう、でも本当のことを言ってくれて有難う……」と何度もつぶやいていたのが印象的であった。

また城島が三田刑事に「吉田のかわいい娘の美香ちゃんと奥さんにあつて、慰めてきてくれ」と、ポケットから自前の一万円札を渡している姿と、白石警部補に「父敬一の奥さん、君江さんに一太の事を説明し慰めてきてほしい」と頼んでいたのを見た専従捜査班の皆は、本当は優しい仁王様の姿を見たように感じていた。

その頃、捜査14課の課長上野は、警視庁副長毛利と会って、事件の解決を報告するとともに、事件のきっかけとなった、特定の政党を有利にするような政策を実施してはならず、これからはメスを入れるようにしなければしないと反省していた。

まもなく夜が明けこの事件の真相を知る事となる一般大衆が如何なる反応をするかを、正義を追求した霞が関P P署、捜査14課の専従捜査班全員と徹夜の仕分け作業に協力してくれた捜査員、鑑識とその協力者達、事件の解決を連絡によりいち早く知ったその他の協力者達は、この犯罪が、本当は誰によって引き起こされたものを理解することになるだろうと思うとともに、まだ多く現存するわが国に潜む悪の根源を、必ず断ち切ると其々の胸に固く誓っていた。

全てが終了したのは午前3時ごろであった。城島は捜査員全員に解散を命じたあと、自分も猪熊とともに署を後にした。

外は事件を少しずつ洗い流すように雨が降っていた。城島は猪熊に「雨などここしばらくなかったな？、風邪は大丈夫か？」と気遣い、近くの屋台に駆け込みおでんと熱燗を注文して、「今日は何時もおどおり浴びるほどに飲もうぜ」と猪熊を囁け、二人は、事件がもたらした関係者の苦痛と猪熊の拘れてしまった風邪を吹き飛ばそうと大声で笑い、夜が明けてしまうまで語り合った。

END

(14)

戻るtop

戻る(index)

戻る(sub0021)

謝辞

最後までお読み頂き有難う御座いました。近いうちに第2の事件記録ファイルを掲載させていただく予定ですので、宜しく願います。

よろしければ、お読みになったご感想を下さいますようお願い致します。  
↓こちらまで！

[戻るtop](#)

[戻る\(index\)](#)

[戻る\(sub0021\)](#)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3291m/>

---

首相が殺された

2010年10月10日04時14分発行